

## 涙腺偽腫瘍の一例

鈴木孝子

### 緒言

慢性涙腺炎は上眼瞼部の外側が腫脹し、概して疼痛、発赤もないことより、しばしば涙腺腫瘍と鑑別することが困難である。今回、私は9才男子の非特異性慢性涙腺炎と病理診断された涙腺偽腫瘍を経験したので報告する。

### 症例

症例 9才男子 昭和53年12月18日初診  
主訴 左上眼瞼腫脹  
家族歴、既往歴 特記すべきことなし  
現病歴 昭和53年10月頃より左上眼瞼の腫脹に気づき某医を受診。眼窩腫瘍の疑いで当科へ紹介される。

初診時所見

視力 右1.0 (n.c.), 左1.0 (n.c.)

眼球運動障害 なし、眼球突出 なし、眼瞼下垂 なし、涙液分泌テスト 右10 mm, 左10 mmで正常、左上眼瞼は《写真1》の如く外側1/3に腫脹、軽度の発赤あり。球結膜は充血し、触診にて上眼窩外側に母子頭大の弾性硬の腫瘍を触知す

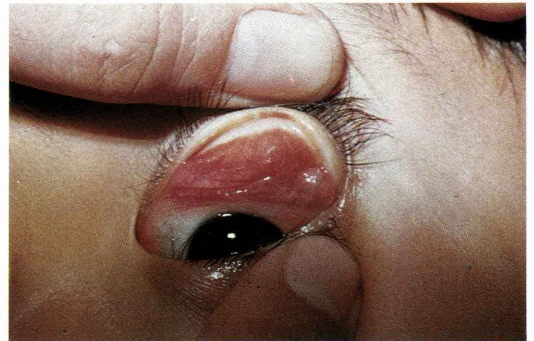


写真 2.

る。上眼瞼を反転し結膜嚢を充分にひらくと《写真2》の如く腫瘍の一部を透見する。

中間透光体 異常なし、眼底 異常なし、全身検査、血液一般検査、血清学的検査、ワッセルマン反応、ツベルクリン反応等異常なし。頭部単純X線撮影にて眼窩骨の拡大や欠損、異常陰影等はみられない。CT scan にては《写真3》の如く左眼窩外上方に境界不鮮明な high density mass を認める。消炎剤を2週間使用するも腫瘍の大きさは変化しない。以上の所見より左涙腺部腫瘍を疑い、昭和54年2月1日全身麻酔下にて腫瘍摘出を行った。



写真 1.

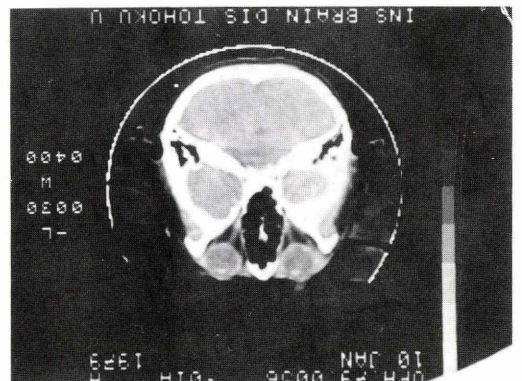


写真 3.

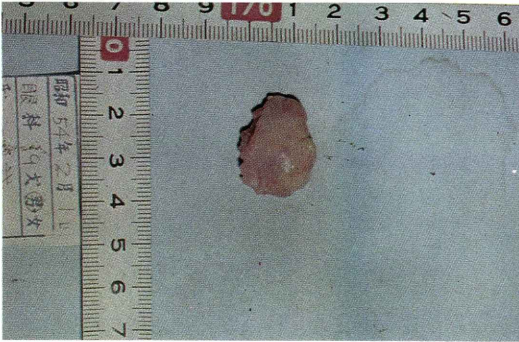


写真 4.

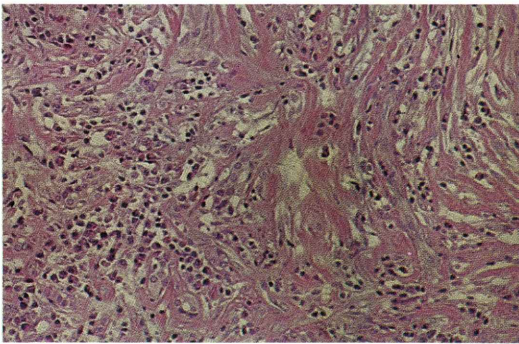


写真 5.

手術方法は外眼角切開を行い結膜より眼窩へ入った。腫瘍は左上眼窩の耳側より内側へ1/3で深さ2 cmのところ存在した。《写真4》の如く弾性硬で黄灰色、分葉状で3つの小葉から成っていた。外は被膜に囲まれていた。

周囲組織を損傷しないように被膜を残して全腫瘍を摘出した。奥の方は周囲組織とかなり強く癒着していた。大きさは2.5 cm×2.0 cm×0.8 cmで重量は1.2 gであった。術後はしばらく眼瞼下垂及び外直筋麻痺が続いたが、現在は消失し、初診時みられた眼瞼腫脹も消失し、涙液の分泌も異常なく経過良好である。摘出した腫瘍の病理診断は《写真5》の如く、一部にリンパ球の形成を伴ない、リンパ球、形質細胞の著しい浸潤のみられる非特異性慢性涙腺炎であった。

## 考 按

慢性涙腺炎は1840年 Mackenzie<sup>1)</sup> によって報告されてより、よく知られるようになった。

Duke Elder<sup>2)</sup> によれば比較的一般的な疾患であるという。Reese<sup>3)</sup> は涙腺の腫脹の26%は慢性涙腺炎であるという。

症状は概して疼痛はなく眼瞼上部及び外側が腫脹し、ふつうは著明な眼瞼下垂を伴うという。本例にては下垂は伴っていないが、これは上眼瞼挙筋への圧迫侵襲がなかった為と思われる。眼球は圧迫の為下及び中へ偏在し複視がおこることが多いという。本例にては幸いにもそのような眼球運動の障害となるべき眼筋への圧迫もなかった。

涙液量は概して正常のことが多いが、しばしば過剰または減少することがあり一定していない、本例にては正常涙液量であった。

慢性涙腺炎の結果としての涙腺の肥大はしばしば腫瘍と鑑別することが困難であり、偽腫瘍と呼ばれる。本例に於ても諸検査の結果及び消炎剤の効果がないことより涙腺腫瘍を疑って手術を行った。摘出に際し biopsy の必要も考えたが、その為の全身麻酔が必要なこと及び視機能障害等の悪性を思わせる所見がなかったため、最初から腫瘍摘出を目的として行った。Duke Elder<sup>2)</sup> によれば、涙腺偽腫瘍は2つに大別される。Inflammatory pseudotumor と Reactive lymphoid hyperplasia である。これらは両者とも炎症が起源であるが、後者は組織学的にリンパ組織の増殖が優位にある特別な群である。前者はさらに非肉芽性、肉芽性に分かれる。非肉芽性のものはよくみられ、腺実質は慢性炎症細胞を伴った結合織でおきかえられる。その組織像は部位によって異なり、細胞浸潤の著しい部位、又は硬化した膠原線維によって占められる部位もある。肉芽性のものはまれで、その原因としてはサルコイドーシス、梅毒、結核等の特異なものである。

Reactive lymphoid hyperplasia はリンパ球の増殖を特徴とする炎症性のものである。即ち germinal centre を含むリンパ球やリンパ球の集団の中に多くの形質細胞、細網細胞があり、それらは内皮の増殖した血管を伴っている。本症における組織像は、著しいリンパ球と形質細胞の浸潤を認め、腺細胞、導管の萎縮はみられるが、結合織によっておきかえられることはなく、また結核、

梅毒等の特異的な像もみられなかったことより、Reactive lymphoid hyperplasia と思われる。

### 結 語

本症例は、臨床的に涙腺腫瘍の診断の下に腫瘍摘出術を行ったところ、組織学的に非特異性慢性涙腺炎で、Duke Elder のいう Reactive lymphoid hyperplasia と思われる 1 例であった。

稿を終るに臨み御指導いただきました水野教授に厚く御礼申し上げます。

### 文 献

- (1) Mackenzie: A practical Treatise on the Diseases of the Eye, 3rd Ed, *London*, 87 (1840)
- (2) Duke Elder: Textbook of ophthal vol. 5, 647 Kimpton, *London*, (1952)
- (3) Reese: Tumors of the eye (1963)  
(昭和 54 年 3 月 18 日 受理)